

たまま急激に総兼業化した良い例である。川尻は、かなり農業が占める位置は高いが、森よりは兼業化が進んでいる。兼業の種類は雇われ兼業が主で、森は人夫日雇が多く、大場は恒常的な勤務が多く、川尻はその中間である。この地域では、津幡から北へかけて零細規模の繊維工業が多く、鉄工所も一円に分布し、30分以内で通勤ができる範囲内に工場があり、農業外の職場に困らない。

兼業化を進める様々の要因のうち、農業内の要因として経営耕地規模の大小が極めて重要と思われる。これはそのまま農業を主体とする傾向の強弱を結びつき、農業労働力の質をも決めるもので、それらは兼業の種類を選択している。農業外的要因としては、まず消費生活の向上があげられ、これは近辺に都市的な性格を帯びるものがどの程度存在しているかが非常に大きい。又農村内に地場産業が発達しているということも大きい。しかし北陸の様に、全国水準に比べて工業が遅れをみせている地域では、ある程度に農業を維持していく必要があるため兼業化がかえって進むものと思われる。

東京の都市公園の地理学的研究

武井淑江

本論文は東京都、特に23区部を対象地域として、都市公園を全般的に考察したものである。

目次（論文構成）

第一部 概観，第一章 公園の定義・分類，第二章 東京の都市公園，第三章 公園の歴史，第四章 東京の公園の歴史

第二部 公園の地理，第一章 対象公園の概観，第二章 自然環境，第三章 公園地の変遷，第四章 機能

要約

Iの2 東京（23区部）の一人当り公園面積の分布は、中心部に多く、周辺部に少ない。

又周辺部の中では、端の区より、中心部に接する区の方が少ない。

これは、人口密度と大河に接するか、しないかによる。

Iの3 公園の原型としては、世界各地の狩猟園やギリシア、ローマの広場などが考えられるが、

public parkとして発達したのは、欧米においてである。

- Iの4 明治6年(1873)に太政官布告により、東京にはじめての公園(上野・浅草・深川・芝・飛鳥山)が誕生し、関東大震災を経て徐々に拡大されたが、第二次大戦後多くが失われた。しかしまたそれを契機として新設が進み現在に至っている。
- IIの1 東京23区部の都市公園の中で面積1ha以上の公園149ヶ所(S46.4.1現在)について調査した。まずこれらの対象公園を面積的分布からA-15ha以上、B-15~5ha、C-5ha未満の3つに分け、以下の調査の指標とした。
- IIの2 自然環境として、地形と水面について調べた。前者は、公園面積、公園機能との関係が認められ特に斜面の利用には、まだ検討の余地がある。後者は公園内の池などであるが、地形との関係が強い。しかし最近都市化の影響により、自然環境の悪化が見られる。
- IIの3 公園地の変遷では、所有地別にみると、大名屋敷・軍隊・皇室・邸宅→公園のケースが目につく。これは、公園の様式などにあらわれる。
- IIの4 機能として、公園の利用効果と存在効果について調べた。前者では遊戯運動施設の一般的な普及が顕著である。しかし後者は、最近問題になってきたものの、その効果は、前者に比べ遅れている。

最近、自然及び文化環境の破壊に対して、それを維持・整備する存在として、又防災避難地としての公園の機能がさげばれている反面、実態はその役割を十分はたしていないと言える。その上公園地であっても、その破壊が平然と行なわれた実例—その一つが芝公園であるが—もある。公園という制度の是非はともかくとして、この制度を有益に利用するためには、ただ与えられるものに安住することなく私たちが、公園を守り育てていかなければいけない。

私は実際は普段あまり公園を利用していないが、やはり“公園がある”というだけで気分が余裕がでてくるし、それが東京の自然や歴史を刻みこんでいるものならば一層うれしい。単に便利性及び経済上の一時的な観点だけで公園をつくらないようにしてもらいたいと思った。